2022年度第２回　豊岡市総合教育会議（定例会）議事録

・開会及び閉会の日時及び場所

開会日：2022年11月11日（金）

場　所：豊岡市役所　２階　大会議室

所在地　　　豊岡市中央町2－4

開会時間　　午後２時30分

閉会時間　　午後４時 ５分

・出席者の氏名

出席者　　　豊岡市長　　　　　関貫　久仁郎

豊岡市副市長　　　土生田　哉

豊岡市教育委員会

教育長　　　　　嶋　公治

委員　　　　　　佐伯　和亜

委員　　　　　　向井　美紀

委員　　　　　　飯田　正巳

委員　　　　　　成田　壽郎

・事務局等関係者の氏名

事務局　　　教育次長　　　　　正木　一郎

教育総務課長　　　永井　義久

こども教育課長　　和田　晃典

こども教育課参事兼教育研修センター所長　　森山　健二

こども教育課参事兼課長補佐 木之瀬　晋弥

こども育成課課長　吉本　努

こども育成課参事　山本　加奈美

こども育成課参事　河本　美佳

教育総務課課長補佐 植田　真美

教育総務課総務係長 藤田　 祐

政策調整部長　　　塚本　繁樹

政策調整課長　　　井上　靖彦

・日程

１　開　会

２　あいさつ

３　協議事項

⑴豊岡市プログラミング教育について

⑵学校におけるジェンダーギャップへの取組について

⑶WACCU TOYOOKAの状況について

４　閉　会

・会議の概要

―――――――――――――――　開会　午後２時30分―――――――――――――

**[日程１　開会]**

（正木教育次長）

　ただ今から、2022年度第２回豊岡市総合教育会議を開会いたします。会議で活発な意見交換ができますように、招集者の市長に代わりまして、従来から教育次長が司会進行を務めさせていただいております。ただ、私、いささか不慣れでございまして、スムースな進行ができますかどうか不安ではございますけれども、頑張って務めたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、開会にあたりまして、関貫市長よりごあいさつを申し上げます。

**[日程２　あいさつ]**

（関貫市長）

　皆さん、こんにちは。「本日も当会議にご出席をいただきまして、ありがとうございます」と私が言うのがどうか分かりませんけれども、とにかく、皆さんと今日も総合教育会議ということで、教育の内容を議論できるということで、大変嬉しく思っています。

中身に関しましては、テーマを見させていただいておりますが、３つのテーマ、１番・２番に関しましては、内容が大変深くなってくると思っております。１時間半でこれが全部すむのかなという不安もありますけれども、皆さんからいろんなご意見を伺って、私の意見も述べていきたいと思います。よろしくお願いします。

（正木教育次長）

　続きまして、教育委員会を代表いたしまして、嶋教育長よりごあいさつをお願いいたします。

（嶋教育長）

　皆さん、お疲れさまです。まず、コロナのことですけれども、一時は園・小中学校の子どもたち合わせて、１日に50人、60人の感染者という状況がありましたが、ここ数カ月は０の時もあり、一桁台で推移をしております。10月17日から23日までの週は合計３人、その次の週は合計２名ですが、今週に入って、週10人と二桁に入っていますので、気を緩めずに感染症対策をしながら、通常の学校教育活動ができるようにというふうに学校に言っておりますので、そのような対応をこれからもしていきたいと思いますが、なかなか油断はできないような状況だということです。

　それから、２つ目、プールの問題には触れていませんが、実は学力調査の結果で、例年ですけれども、豊岡市の大きな課題として、読書習慣が形成されていないということがあります。１日に30分以上読書している児童・生徒の割合ですけれども、全国と比較して、小学校は４ポイント低い。中学校にいたっては、7.6ポイント、このポイントは、有意な差であると言えます。中学校は30分以上読書している子どもは19.7％ですので、５人に１人しかいない。５人に４人はほとんど読んでいないというような状況があります。

その結果、どんなことが起きてくるかというと、学力テストでどの教科も後半の問題になるまで回答しない、無回答、そこまで読み込めていないというか、行きついていないという状況があります。人格形成においても子どもたちには大変重要な意味がありますので、この課題をどんなふうに解決していくかということを学校、校長先生たちと協議、やりとりをしてきているところです。すぐに結果は出ませんが、それぞれの学校、それぞれの環境で、いろいろな取り組みをしてくれています。

その中で、こんなトピックスがありました。今、大学院に在学中で、学生の小説家です。小説現代長編新人賞というのを２年前に取りました。24歳で執筆歴が13年です。つまり、小学校５年生のときから小説を書いている。豊岡市の出身で、「鯨井あめ」さんという方です。とても気になったので、出身小学校の卒業文集をコピーしてもらってきました。そうすると、本当ににこやかな顔で写真に出ていました。普通、６年生の卒業文集というと、多くの子どもたちが修学旅行の思い出、自然学校の思い出、運動会等の思い出を書くのですけれども、この子は自分がその学級にいて、何がどんなふうに幸せだったかということを書いています。

５年生の時に、〈私は小説を持ってきた時にお世辞だろうが、「すごいね」「上手だね」「面白いね」と言ってくれた。お世辞だけど、私にとって嬉しい言葉。自分の夢にもう一度自信がついたときだった。〉もうこの時に小説家になるという夢を持っていて、そのことを書いています。

最後は小説家の片鱗が伺えます。最後の締めくくり。〈この窓から見える景色は変わらない。杉の木もブランコも「太陽の丘」も運動場で縄跳びをする学年も。でも、吹く風は変わるし、流れる雲も変わる。またどこかで出会う。私もそうなんだ。いつかどこかでまた会おう。出会えたらいいなと思う。〉というふうに締めくくっています。

すごいですね。小学校５年生から夢を持ち続けている。それをまだ追求して、友達から「いいね」「面白いね」と言われて本当にそうだろうかと思って、ネットの懸賞小説に応募したら合格したということなので、絶えず自分の夢を追求しているということ。豊岡市が目指す、夢を持ち続けて自分の夢の実現に向かっていく子ども、まさにそのとおりだし、その中に言ったような様々な非認知スキルが組み込まれているということなので、こんなに誰もがうまくいくとは思いませんが、ぜひとも来年は彼女を呼んで、生徒会のリーダー研修会で、自分の読書生活をずっと振り返り、夢を持つということ、夢に挑戦するということはどんなことかということを中学生に語っていただいた後、中学生が自分たちの読書生活を見直し、どんなことをすれば、あるいは、どんなことができるのかというような、そんなワークショップをしたいと今思っています。今日、初めて情報提供する話ですけれども、そんな先輩が出てきているということです。

ジェンダーギャップを今日扱っていただきますが、過日、文科が委託をしている国立女性教育会館の方たちが来週の月曜日、オンライン研修会をするということで、そのシンポジウムの出席要請が来ました。「女性管理職の登用」がテーマですけれども、豊岡市はほとんどできていないです。今日、これからしますけれども、みんなに自慢できるような話が全くありません。でも、何が豊岡市はいいかというと、市長部局にジェンダーギャップ解消の戦略室があり、そこの解消戦略に教育が位置づけられていて、教育委員会もそれに後押しされながら研修したり、それぞれの学校の教育活動に反映させるといった取り組みをしています。部局と教育委員会が一緒になってやっていくという取り組みは日本全国で少ないということで一定の評価をされています。この総合教育会議も市長部局、市長をはじめ皆さんと一緒になって、豊岡の教育課題を共有し、一緒になって解決するというような会のいちばんの大元になりますので、いい話が今日もできますように、よろしくお願いいたします。

**[日程３　協議事項]**

（正木教育次長）

　それでは、協議事項に入ります。内容につきまして、補足説明をするために、担当部局の職員が出席しておりますので、ご了承ください。それでは、議題の１つ目、豊岡市プログラミング教育について、こども教育課より説明いたします。

（こども教育課木之瀬参事）

　豊岡市のプログラミング教育につきまして、ご説明させていただきます。小学校・中学校それぞれに現状と課題、課題への対応方策について、ご説明をいたします。

　まずは、小学校の現状と課題です。１つ目、ア「実施状況」でございます。小学校では、各学校で、プログラミング教育の年間計画や情報教育年間計画を策定して、プログラミング教育を実施しております。

２つ目のイ「全国学力・学習状況調査で出題」でございます。今年度の全国学力・学習状況調査におきまして、小学校の算数でプログラミングの問題が出題されました。小学校のプログラミング教育につきましては、2020年度から必修になったところでございます。それが３年目にして、出題されたということで、教育委員会としても取り組みの重要性を強く感じたところでございます。

　ここで実際に出題された問題を見ていただきたいと思います。お手元の資料の１－２をご覧ください。こちらが実際に出題された問題となっております。１枚めくっていただいて、４番になります。問題は小学校５年生で学習する図形の書き方に関するものです。まず、説明として、正方形の書き方のプログラムのページがございます。５㎝の直線を引いて、左に90°回転をする。さらに５㎝の直線を引いて、さらに左に90°回転をするというようなことを繰り返していくと、正方形が書けるというような例示でございます。

　１枚めくっていただきまして、(1)で、実際の問題になってきます。この問題につきましては、正方形の書き方のプログラムを例にして、正三角形を書くというプログラムを作ったところ、うまく書けなかった。誤りをどう修正すればいいかを問うものでございます。もともと作ったプログラムというのが５㎝の直線を引いたところで左に60度回転する。また５㎝の直線を引いて、また左に60度回転する。また５㎝の線を引くと、逆コの字のような結果になってしまった。本来描こうとした正三角形にならなかったというようなプログラムとなっています。これをどう修正すれば、正しい正三角形を描けるかというような問題でございます。選択肢としましては５㎝の直線を引く、または、左に60度回転する、いずれを修正すればいいかというような設問になっております。

この問題でございますが、プログラミングの知識がなくても解ける問題ではございますが、授業でプログラミング教育と併せて「Scratch」というプログラミング言語を利用した授業をやっていると、より理解しやすい問題となっております。本日は時間の都合で１番だけのご説明になるのですが、また２番以降も興味深い問題となっておりますので、後ほどご覧ください。

　３つ目、ウ「アンケート結果」です。９月に各小学校の情報担当の先生に対しまして、プログラミング教育に関するアンケートを行いました。アンケートの内容でございますが、小学校については、保有機材・使用言語、そして、低学年・中学年・高学年、各々での実践の内容について、ということになっております。結果でございますが、まず、保有機材につきましては、１クラスが授業を行うのに十分なロボット教材を整備している学校数が25校中10校であり、整備が不十分な状況が判明いたしました。なお、整備している機材の種類につきましては、LEGOが14校と多い状況になっております。

　続いて、言語でございますが、全校で「Scratch」という言語を使用しております。傾向といたしましては、低学年から中学年は「Viscuit」というプログラミング言語で、中学年から高学年は「Scratch」を使用している学校が多いという状況となっております。

また、実践の内容を見てみますと、算数や理科などの教科での実践は数が少ないというような状況でございました。「Scratch」などのプログラミング言語やロボット教材を利用して、プログラミングに特化した実践が実態としては多くなっております。プログラミング的思考を学ぶには、主題に特化した授業のほうが教えやすいものと思われます。

それでは、ここで先ほどのアンケートの報告で出てまいりました機材、言語について、簡単にご説明をいたします。はじめに、プログラミングのロボット教材としては、おなじみのLEGOでございます。こちら、ブロックパーツの他にモーターやセンサーを使って、ロボットを組み立てて、タブレット上でブロックのプログラムを組み、プログラムをロボットに送信して、動作させるというようなものでございます。複雑なプログラミングも体験できることから、小学校高学年から中学生までに適した教材となっております。

続きまして、「Viscuit」というプログラミング言語でございます。この言語は自分で描いた絵をメガネというツールを使用して、動かすことによりプログラミングを体験するものでございます。単純な仕組みですので、小学校の低学年にコンピューターに処理させることの楽しさを感じてもらいながら、プログラミングを体験するのに適した言語となっております。こちらで絵を描いて、これがメガネで作ったものです。こちらにドラッグしていって、ちょっとずらしてドラッグしていくと、こっちの絵とこっちの絵の間で、魚が動くというようなものになっています。

　続きまして、「Scratch」でございます。この言語は写真、左側、こちら側に用意してある様々な命令を組み合わせることにより、画面に右上のキャラクター、ネコのキャラクターがありますけれども、こちらを動かすものでございます。動きや見た目、音に関する命令の他、条件式や繰り返し処理などの要素がブロック化されておりまして、それを組み合わせることにより、かなり複雑なプログラミングまで体験することが可能となっております。プログラミングに必要な要素が網羅されておりますので、小学校の高学年から中学生まで、幅広くプログラミングを体験するのに適した言語となっております。

　レジュメに戻ります。課題に対する対応方策についてご説明をいたします。まずは、ア「研修・サポート体制」でございます。１つ目は「研修体制」です。教育委員会では、概ね年に１回、プログラミング教育に関する研修を実施しているところでございます。今年度は12月に県内の中学校の先生を講師にお招きして、情報担当の先生を対象にした研修を実施する予定としております。そこで受講した先生は、各学校に戻って、校内研修を行って、知識を広めてもらうというような仕組みになっております。また、現状では、ICTが不得意な先生でプログラミングの授業の実践が進んでいないというようなことが見受けられますので、来年度については、スキルの底上げを目指した研修を検討したいと考えているところでございます。

　続きまして、２つ目、「サポート体制」でございます。プログラミングに特化した授業については、やはりすべての先生が指導できるようになるのは、なかなか現実的には難しいと考えております。従いまして、例えばロボット教材を使用するような授業については、外部の専門家の講師の利用についても検討していきたいと考えているところです。

　続きまして、イ「カリキュラム・教材の統一」です。１つ目の「カリキュラムの統一」です。本市では、子どもたちに身につけさせたい情報活用能力を体系化いたしました豊岡市情報教育指針を策定しております。別添資料１－３をご覧ください。その中では、プログラミング教育において、身に付けさせたい項目、資料の赤字で示してあるものが記載されておりますが、内容が抽象的なものとなっておりますので、今後、より具体的なものを作っていく必要があると考えているところです。

　続きまして、２つ目の「教材・機材の統一」です。カリキュラムの統一と同時に、教材の統一も必要となってまいります。教材を統一することによりまして、その教材に対するノウハウの蓄積・共有も図ることができるようになると思います。

　続きまして、中学校の状況です。まず、「現状と課題」でございます。１つ目、ア「実施状況」です。中学校では主に技術家庭科の技術分野で、プログラミング教育を実施しております。２つ目のイです。「技術科教員の不足」です。小規模校では先生の数が限られていることから、技術科の先生については、実際のところ、９校のうち４校しか配置ができておりません。配置されていない学校では、技術が専門でない、例えば数学や理科の先生が技術を教えているというような状況です。

　続きまして、３つ目のウ「高校との連携」です。今年度から高校で情報１という科目が必修になりました。2025年度からは大学入試共通テストで出題される予定となっております。そこでは、専門的な「Python」というプログラミング言語を利用した学習も入っているのですが、中学校の先生からは高校で本格的なプログラミングを学習するために、必要な知識を中学校の間に身につけさせることができるのか、不安の声が上がっているという状況があります。

　続きまして、「アンケート結果」です。中学校でも同様に、９月にアンケートを行いました。アンケートの内容としましては、保有機材、使用言語、また、プログラミング教育について、困っていることについて、答えをお願いしたところです。結果として、まず、保有機材ですが、１クラスが授業を行うのに十分なロボット教材を整備している学校数が、９校中３校でした。教材もLEGOのような高額なものではなく、約3,000円程度のものとなっております。

　次に言語ですが、小学校と同様「Scratch」が中心ですが、まだ決まっていないという学校も２校ございました。実践についても、「技術家庭科でしか行っていない」であるとか、「免許外の先生が教えているので、専門的な授業ができない」といった意見をいただいているところです。

　課題に対する対応策について、ご説明をさせていただきます。中学校では技術科での実践が主となっておりますので、技術科の先生への支援を行っていきたいと考えています。まず、「計測・制御のプログラミング」指導案の作成です。高校でのプログラミングの学習に必要な知識を市内すべての中学校で身につけられるよう、統一した指導案の作成について、来年度予算で要求したいと考えております。来年度、有識者に助言をいただきながら、指導案を作成するとともに、環境整備といたしまして、ロボット教材の購入や技術室への無線のアクセスポイントの設置を計画しているところです。2024年度には、2023年度に作った指導案を基に、技術科の先生への研修を計画しております。

　続きまして、外部講師の検討です。中学校においても小学校と同様、特に免許外の先生が教えている学校については、専門的な授業というのが難しいという状況がございますので、外部の知識を持った講師の方の活用を検討してまいりたいと考えております。

（正木教育次長）

　担当課からの説明は以上となります。ご意見がございましたら、よろしくお願いしたいと思いますけれども、市長ご自身、過日、日高東中学校でプログラミング授業を実際に視察いただいております。その時にお感じになられたことですとか、今の説明をお聞きいただいた印象でも結構ですので、お話しいただければと思います。

（関貫市長）

　今の説明があった中で、言わせていただくと、このプログラミング教育というものに対しての苦手感というのがすごく感じられるというのがあります。説明の文言の中に、「専門的授業がなかなか普通の先生にはできない」とか、「専門家を利用すべきである」という内容で説明があったのですが、そう思っている限りプログラミング教育を子どもたちに教えることはできないと思います。学術的な意味での教育ということでアプローチするのか、プログラミング教育によって何を育むかという目的によっては、専門的知識だとか専門家の意見だとか、僕は全くいらないと思う。何が必要かというと、面白さと、それに対して興味を湧かせるということ、それをやっていけば、自ら子どもたちは、教材の１つの例えば「Scratch」で何かを作るだとか、「Viscuit」で絵を描くということをやっていくと思う。今のように構えたかたちで子どもたちにさせて、これを教えるには専門家が必要であるという意識がちょっとありすぎなのかなと思う。

僕はこの「Scratch」でやるのと「Viscuit」でやるのと両方やったことがありますけれども、要するに遊べばいいのです。先生も「Scratch」を見ながら遊べばいいのです。遊ぶというのは、先生に関しては、時間の問題があるというので、出来ればという希望的に言いますけれども、家に帰って自分のパソコン上でインターネットを見るという機会があれば、その時間これを使って遊べる。そうやって、遊んでいくと、なんでこれがこういうふうになるのだろうかという疑問が当然出てくるわけですから、そこでは疑問を解決するという方法論がなかなか見つからないということがあるけれども、そういったところでは、できるならば知っている方に聞くとか、専門家に聞くということをすれば、すぐに分かることであって、ちょっと今の感覚でやっていくのであれば、別にやらなくてもいいかなという感じです。

プログラミングどうのこうのということだけで言うと、もう小学校、もう十何年以上も前から、小学校３年生の子がパソコンで、当時こんな「Scratch」とかもなかったのですけれども、ゲームを作ったりして、それを披露していたという実態もあるから、やはり、できる・できないでいうと、誰でもできるというふうに考えたほうが正しいと思う。ただ、それの提起の仕方と、それの使い方の教え方、そのことに気をつければ、何ら専門的な知識なんて、このレベルだったら、要るなんてことは全く考えていない。

　教材のことでもLEGOを使ってやるということが中学校から、先日も見た内容ですけれども、あの２時間で子どもたちに提供するとしたならば、あれでは何もならない。あれはプラモデルを組み立てて、電気を通して、言われた通りのものを並べて動かして、「ああ、できた」というだけであって、教育の目指す論理的思考だとか、そういうことを育むなんてことには、ちょっとつながらないというふうに思いました。あれが例えば２時間ではなくて、連続的にこの前使ったLEGO自身がなぜこういうふうに動くのかとかね、動く諸元はどういうところにあるのだろうかというところから説明を受けるには、それに対しては動作確認をするだとかという行為があればいいのだけれども、あれは敷かれたレールに乗って処理しているだけだったので、あれは経験の１つにしかならないなという感じを受けました。

予算の関係でLEGOを各校の、もちろん１人１人に与えるなんてできないから、市全体で何セットか用意して、それを使い回すというようなやり方にしていくという方法は、聞かせてもらったけれども、それでは子どもたちが得るものの内容で言うと、いいものは得られないという思いがしました。もっと先生がやるとしたら、先生にもっと遊んでほしい。これ、いくらでも遊べるので。「Scratch」ということで、対象で言うと、遊びということになかなかつながらないかもしれないけれども、これは石川県の加賀市では、数年前からこういうことに力を入れていて、「Scratch」はもちろん使えるようになっている子どもたちは多いけれども、その前段で「みんなの時間」という世界的な組織があって、そこが提供しているものを使ったら、初めからゲーム感覚でできて、ゲームを理解するためにはこういう「Scratch」というのを見ながらやるから、そこで理屈も分かってくるということがあるので、即これを教育として与えて、将来、そういったところの考え方が、あらゆる場面で応用ができてというふうになるとは感じられないというのが実感です。

（正木教育次長）

　ありがとうございます。市長のお考えをご発言いただきましたけれども、教育委員さんもそれぞれ授業をご覧いただいておりますけれども、その時のご感想ですとか、もともとプログラミング教育に対して、お持ちのお考えということに関して、お話しいただけたらと思います。

（佐伯委員）

　今、市長が「まず遊ぶ」とおっしゃいました。まずは、「Viscuit」や「Scratch」を使って、授業で親しんでもらわないといけないというところでしょうか。

（関貫市長）

　先生という対象のもとに子どもたちに教えるということは考えず、先生に遊んでもらう、親しんでもらう。理屈としたら、大学を卒業して、教員免許をもらって、教鞭に立っている人ができないわけがないという思いがあるから、文系だとか理系だとか関係ない。アプローチの仕方が悪いから何か壁を作っちゃっているという感じが。

（佐伯委員）

　そういう意味では研修体制も少し変えないといけないかもしれませんね。プログラミング教育の中身についての研修ではなくて、「この機材を使って親しむ」というものも研修のひとつに入れたらいいかもしれませんね。

（飯田委員）

　市長がおっしゃっているように、教育目的をしっかりと明確にしなければならないということについて、よく理解ができます。ただ、2025年から大学入試で情報が必須となり、さらには、将来の社会情勢や経済状況がどのようになるか分からない。今、何が必要なのかということを考えたときに、例えばパソコンもそうですけれども、やはり苦手感がある人はあります。どうしても、今の時代から取り組み始め、むしろ、そういうことを平然と日常の中に取り込もうとしている。そのことはこれからの子どもたちもスムースに入れるものと思いますが、その方向づけは必要であり、教え方をどうするかという課題はあると思います。

先日、東中の授業を見させてもらいました。確かに楽しく、苦手感が出ないような教え方をされているのを見た時に、そういうことはどうしていくのかなというのが教育的な課題だと思いますし、その必要性というのは感じました。

（向井委員）

　市長がおっしゃったことはよく理解できます。確かに子どもたちは、大人よりも習得が早いと思います。先日、学校訪問をした時にも、プログラミングではありませんけれども、１人１台端末ということで、iPadも使っていました。授業での使い方も早くて上手で、さすがに子どもたちは早いなと感じました。使って、遊んでいくうちに使いこなせていくというのは、本当にその通りだと思いました。ただ、現状はLEGOを使っているのが25校中14校ということで、全校に行きわたっていませんので、どの学校でも同じような環境が整っていくことを願っています。

（関貫市長）

　それはいくらでもできることであって、ただLEGOを使うという頭があるからできないだけです。

（向井委員）

　それはそうですけれども、他のことに関しても、豊岡市の子どもすべてが同じような環境で学べるようになってほしいと思いました。

（関貫市長）

　このコンピュータープログラミングに関する環境ということですね。

（向井委員）

　そうです。

（関貫市長）

　それは統一して、全部できると思いますよ、簡単に。今はできる方法を取っていないだけであって。

（向井委員）

　先ほど市長が、先生方が専門的な指導ができないから難しいというようなことをおっしゃっていましたが、今、技術科の先生が教えていて、これは仕方がないことですけれども、９校中４校にしか技術科の先生は配置されていません。そういう点においても、何らかの手立てがあればいいと思っています。

（関貫市長）

　教えていることではなく、教える側のこと。

（向井委員）

　教える側です。

（関貫市長）

　それは技術の先生でなくても十分できることだから。数学の先生なんかも適任になるかもしれない。

（向井委員）

　そうですね。

（成田委員）

　確かに市長がおっしゃっている、「遊ばせながら学んでいく」、それは本当に大事なことだと思います。今は１年生からタブレットを持っていますから、まだ日が浅いのにタブレットを操っている姿を見ます。自分の意見を書いて、モニターに反映させるということを１年生がやっている。大したものだと思います。そういう意味で、遊びの中で慣れていくということはあります。

ただ、プログラミング教育というのは指導要領にもしっかり書かれているように、国の教育の目標として、力をつけていかなければならないと定められたものです。教育というのは、目的を持ってする。プログラミング教育の授業の中で、こういう力をつけるために、こういう教材を用意して、先生はこういう指導過程を経て、そして、どういう力がついていくかというような、教育の１つの流れがあると思います。そういう意味では、目的・目標をしっかり立てて、指導計画をしっかり立てて、そして、その力をつけるために、計画的に取り組んでいかなければいけないものだと思います。

そのためにも学校での授業うんぬんということがあるわけで、昔、プログラミング教育は指導要領もなかったわけですけれども、今や、デジタル化が遅れると日本は凋落した国になるという、国家をあげての大きな課題でもあると思います。それだけに力をつけていかなければならないというような大きな課題でもあろうと思いますので、そういう目で見ていく必要があると思います。目的・目標に向かって、計画・立案していくという、１つの教育の流れを考えた場合に、そこには教材も必要ですし、先生の研修・指導技術も喫緊の課題として、必要になってくるものだと私は思います。

　過日、中高のプログラミング教育の様子をテレビで観ました。こんなことを言ってはいけませんが、かなり仕込まれた優秀な生徒だったかもしれません。自分たちでロボットを作る、そういう授業をやっていました。ロボットの先にはコンテストがあり、いろんな学校で作ったロボットを競い合うわけです。ピンポン玉のような玉を一定時間内で、いかにたくさんロボットに運ばせるかという課題があります。そのロボットを作り、コンピューターで動かしていくという授業内容でした。

その後で、子どもたちがインタビューを受けていて、「将来どんなことをしたいか」という質問に、「災害に非常に関心があり、将来、人が行けないような災害現場に出向いて、大いに活躍するようなロボットを作ってみたい」という夢を語っていました。教育長から夢の話がありましたが、プログラミングもただ遊んで、面白くて、慣れてきたということもありますけれども、やはり教育の目当てというのは、最終的には夢に向かっていくという理想を持って進めていくべきだと思いますし、そういう意味では、計画的な教材準備、それから、指導、そういうものは必須ではないかと私は思っています。

（関貫市長）

　それは全然ポイントが違います。遊んで暮らせと言っているわけではないです。プログラミング教育の内容を教えるのは、ロボット作りを目標としているわけではないのです。論理的思考と、何かの壁にぶつかった場合にそれに対処する気力・体力・思考のパターンを養わせるという感じでこれが始まったのですから。遊べと言ったら、そういう遊びって、適当にやれという意味ではなくて、先生がプログラミング力、Scratchを用いて教えるのは難しいことだ、専門的だということを強調されるならば、もっともっと自分で親しむということをされて、それを遊びと言ったわけで、当然、目標としたら、そこに指導があるのですから、中学校においては、「計測・制御のプログラミング」を学校としてはやらなければならないので。当然、それをやられるための方法として、先生方のやり方を考えていただいて、先生方にはもっと親しんで、遊んでいただければ、こういう目標に向かって、生徒たちにいくらでも教えることができるはずです。

とりあえず、よくロボットどうのこうのということで、紹介がありますけれども、あれをああいうふうにやらせることが目的ではないというのは、皆さん、分かっていない。あれをやるプロセスの中に、ここで求めている教育的見地の内容を充実させるという、子どもたちに。それができるということで、そのプロセスの１つとして、あれをしているだけであって、方法論はいくらでもあるということだと僕は思っています。

（正木教育次長）

　ありがとうございます。市長のお考えというのは、遊びという要素を含めた中での教育というふうなお考えかなというふうに。

（関貫市長）

　要素をこの中に入れるというのではなくて、先生が専門的な知識がいるということではなくて、遊びの知識って、自分でどんどんどんどん入れるでしょう。面白いから。そうしたら、この「Scratch」でも自分で遊べばいいということ。それを自分のものにできたら、簡単に生徒たちにも教えられる。授業の中で遊べと言っているわけではありません。

（正木教育次長）

　ありがとうございました。今、市長、または教育委員さんから、いろいろとご意見をいただきました。教育委員さんからは、研修の内容に工夫が必要なのではないかとか、後は教え方、また、目標を持って、計画的に指導するべきではないかというようなお考えも出していただきましたけれども、今日は結論を得ようという場ではございませんので、それぞれのご意見をお聞きして、意見交換をいただくという場でございます。いろいろな意見を出していただきましたけれども、教育長、何かそういうことも含めまして、何かございましたら。

（嶋教育長）

私は英語の教員免許を持っており、中学校で英語を教えていました。2012年、小学校に英語が導入された時のことです。先生は、誰もが中高と大学でもずっと英語を習ってきているので、基礎知識があるはずだから、「英語で先生が遊べばいいんだ」と、「英語を使うって楽しいね」って授業の中でやればいいと、学校に向けてそういう指導をしたら「それはあなたが英語を知っているからできるんだ」みたいな反応があったことを思い出します。まだ英語はそんなふうにして、それぞれ知識があるからいいけれども、プログラミング教育はそうはいきません。私が東中のプログラミングの授業を観たときにいちばん危機感を感じたのは、グループに分かれて、４人、５人が一緒になって、共同作業をする場面でした。府中の子が圧倒的な技能を持っていて、経験値が高くて、どんどんどんどんリードしていく。「そんなことは知っているよ」みたいな感じで、ものすごく差があったのです。公教育でいちばんしなければならないのは、経験や環境の差を埋めるということです。さらに、プログラミング教育に関しては、大学の入試も今度は絡んできます。それらの社会状況を背景に、全国の学力調査の算数にプログラミング思考の問題が出題されました。小学校はまだいいです。小学校はプログラミング的思考をつけるという大前提で、プラグドとアンプラグドがあり１年生・２年生・３年生はアンプラグド、つまり何も使わず、例えば掃除のやり方１つでも、プログラミング的な思考とはどういうことか、そのことが自分たちの生活をよくするというのは指導できるのですけれども、小学校高学年や中学校はそうはいきません。大学入試制度を受け高校に情報１が入ってきて、それを目の前にした中学校の先生たちは、やはり不安は持っているだろうなという感じです。通常の学習指導要領では、教科や領域に対して、この時間は何時間って、決まっているのですがプログラミングは中学校で何時間必要と決まっていないですね。

（研修センター森山所長）

　時間でこれだけしなさいというのは決まっていないです。

（嶋教育長）

　決まっていないから差が出てくるのです、ここで。なので、指導計画を差がつかないように、市で作ってやるということは大切。しかも、こんな資料だけとかじゃないです。これだって、プログラミングも英語もそうだけど、can doだから、「～ができるようになる」とか「楽しめる」とか、そういう力がついたかどうかということは、情報活用能力なので、能力表を作るのだったら、そこをしないといけないのです。そこで差が生まれないように、私たちはどんな人的配置をし、どんな環境を作ってやり、ということを考えていかなければいけない。

市長が言われていることを、教育委員の皆さんは、今一定の理解をしたようにいわれましたが、今、やっている中で、結構差ができているという現実があるので、そこのところは今後実態を見ていただきながら、協議をして、もしかしたら、また再度予算化をお願いすることになるかもしれませんけれども、公教育でいちばん大切なことは、もう一度言いますが、しっかりと同じように漏れない計画を作ることと、差異が生まれないように配慮するのが教育委員会の仕事だというような考えを私は持っています。

（関貫市長）

　当然、その点に関しては、今計画が大事だと言われましたが、その通りです。それ自体が間違っていたと言ってないし、その内容を実行するということが各校違っていたら、僕はよろしくないと思うので、私、今の時点で、県のほうに県統一の内容を出してほしいということを、やり方という意味でも、中身に関しても、それをお願いしているのです。去年も一部お願いしたのだけれども、これを春からやります、そういうふうな方向でやります、というふうに教育事務所の方は言われたけれども、結果やっていないというのが現状なので、これをもうちょっと強めに言って、少なくとも県全体で、同じような内容で子どもたちが教えを受けて、もちろん、教える側の問題もそこで出てくるかもわからないけれども、そういった計画という面では統一した内容でやるようにしてほしいというのは、今強く言っているところです。

（嶋教育長）

　それはぜひ私たちも声を挙げていきたいと思いますし、同じ土俵に立つという意味で。

（正木教育次長）

　ありがとうございます。少し時間が押していますので、この議題につきましてはこのあたりでよろしいでしょうか。

次にまいります。議題の２つ目、学校におけるジェンダーギャップへの取り組みについて、こども教育課より説明をいたします。

（こども教育課和田課長）

　私のほうからは、学校におけるジェンダーギャップの取り組みについて、資料に基づいて説明させていただきます。豊岡市が2021年度より策定しました「豊岡市ジェンダーギャップ解消戦略」では、ジェンダーギャップが解消したまちの姿を「誰もが居心地よく、自分らしく輝けるまち」とし、ジェンダーギャップの解消に向けまして、６つの手段を掲げ、ジェンダーギャップ対策室を中心に取り組みを進めているところです。その中で、教育的な部分につきましては、手段６として、子どもたちがジェンダーギャップ解消の必要性を自分の言葉で語っていることを目指し、教育委員会も連携しながら、この実現に向けて取り組みを進めているところです。

　今年度、ジェンダーギャップ対策室と連携した主な取り組みとしましては、４月に教育委員の研修会を行いました。それから、８月に中学校のリーダー研修会、及び学校園管理職の研修を行ったところです。市内の管理職の研修につきましては、市内の校園長を対象にしまして、「教育分野におけるジェンダーについて考える研修」をテーマに立教大学の萩原なつ子先生、そして、国立女性会館の飯島絵理先生に「ジェンダー支援にある保育・教育」と、また、「教育分野における男女共同参画の推進」について、講義をいただきました。

　講義の中で、お２人とも男女共同参画社会の実現を阻む要因の１つは、固定的な性別役割分担に対する無意識の思い込み、アンコンシャス・バイアスによるものであること、また、環境や経験を通して作られる、誰もが持っている思い込みや、偏ったものの見方に気づいて、行動を変えていくこと、それが大切であるといったご示唆をいただきました。

　学校の教育活動を展開していく中で、ジェンダーギャップについて、あまり意識というものがなかったというような管理職からは、改めて考えてみるということで、例えば児童の制服について、男児は半ズボン、女児はスカートとしているとか、陸上教室は男性の教員の指導が多くて、金管バンドとなると女性といったような配置になっている。また、管理職は２人とも男性、あと、教務主任と生徒指導担当、そういった公務分掌の中で、男性が多く割り当てられている。荷物を運ぶときに「男子、手伝って」とか、「女の子らしいね」といった声かけをしてしまっている。また、中学校の勤務が長かったという先生については、小学校に異動したときに男女混合名簿に非常に抵抗があった、そういった意見が聞かれました。そういった教員が持つアンコンシャス・バイアスについて、気づく、そういったことが見られました。

　次に、中学校のリーダー研修会については、これも立教大学の萩原なつ子先生を講師として、オンラインでグループワークを実施しました。その中で、生徒のほうから校長や教頭、PTAの役員は男性が多い、行事の準備などは男子が重い荷物を運ぶことが多いとか、男子のほうが厳しく言われたり叱られやすい、そういった意見が聞かれました。学校の教育活動を行う中で、教員が持っているアンコンシャス・バイアスが日常の指導に無意識に反映されて、それが生徒に自然と刷り込まれていっている。そんな可能性もあるのではないかというようなことを感じた研修でした。教員自身が持つアンコンシャス・バイアスに気づき、行動を変えていくといった必要性を感じたところです。

　次に、本市の課題としまして、教員の管理職に占める女性の割合が低いといったことが挙げられます。これは、本市の男女別職員の職種別の構成ですが、小中学校全体では女性の教員が多くなっています。ただ、それを職種別に並べていきますと、ちょうど主幹教諭を境に教頭・校長になるにつれて、男性教員のほうが多くなっています。校長・教頭については圧倒的に男性のほうが多い。こんな現状が見られます。これは、全国や但馬と比べましても、豊岡市の女性の管理職の割合というのは低くなっているといったことがありました。

2019年度に行いました学校教員に対する意識調査、「管理職になりたいか」という問いに、「管理職になりたい」「できればなりたい」と答えた女性教員は3.3％という結果になっています。「あまりなりたくない」「絶対になりたくない」という理由の中で、男性の意識と大きく差があった項目につきまして、「自分にはその力量がない」といったもの、それから、「労働時間が増えると家庭の育児や介護に影響が出てくる」また、「責任が重くなると家庭の育児や介護に影響が出てくる」といった意見が多くみられました。育児や介護といった家庭での役割以外に、「自分にその力量がない」と感じている女性が多くいるといったことが、管理職になりたくない要因の１つになっているというような現状が見えます。  
　このような研修とか実態を通しまして、今後、学校におけるジェンダーギャップを解消していく取り組みとして、１つは、児童・生徒の多様な選択を可能にしていくといったこと、そのために、例えば進路指導の充実であるとか、学校行事や体験活動、こういったものを通した協働的な体験を充実させていく必要があるのではないかと思います。

　２つ目の手段として、多様な価値観を認めていくといった取り組みを進めていく。そのために道徳とか、総合的な学習の時間、コミュニケーション教育等を通して、他者理解や他者との合意形成などを図っていく必要があるのではないかと思います。

　また、先ほど出ましたアンコンシャス・バイアス、そういった思い込みを解消していく、そういった意識をもって、教育に取り組む必要性、あと、教科等を通して、自立や共生、また、男女の平等といったことについて、学習を深めていくといったことも必要であると感じています。

また、女性管理職の登用と学校の意思決定の過程の参画といったことで、女性教員の自己肯定感を高めていく必要もあるかと思います。また、校務分掌に男性・女性の偏りが見られますので、そういった公務分掌の見直し、また、多様な人材が発揮できる職場づくり、あと、男性も家事や育児、そういったものに参加していく環境づくり、こういったことを取り入れていく、意識していく必要があるのではないかというふうに感じております。

（正木教育次長）

　意見交換に入りたいと思います。まずは、今の説明をお聞きいただきまして、市長、また、

副市長、どのようなお考えをお持ちになられたのかお話しいただけたらと思います。

（関貫市長）

　教育現場での考え方というのは、なかなか発言しにくいことがありますね。例えば、最後の方で説明していただいた女性管理職の登用と学校の意志決定の過程の参画の中の校務分掌の見直しということで、男女の違いがあるというような話を言われましても、僕はちょっと中身を想像できないので、中身を紹介してもらえませんか。どんなことをこれで直していけば。

（嶋教育長）

　私のほうから説明します。校務分掌で中学校ですけれども、９校あるのですが、教務主任は９校中７校が男性、それから、生徒指導、これもご存じのとおりです。全部男性です。それから、学年代表、複数学級ある学年の代表が９校のうち、全部で４人だけが女性の学年代表。つまり、主たる問題が起きたときとか、主たる意志決定をしなければならない場面に、ほとんどが男性の教員が関わっている。ここにも大きな偏りがあって、そうなってくると、例えば不登校や生徒指導などの対応をするときに、経験値で、気合いと根性で生徒指導をやっていた人ばかり集まってもいい話にはならないのです。お母さんの立場、あるいは、子育てにとても困った立場の人たち、そんな意見を聞かないと対応できないような状況になっているので、女性がそんなふうにして意志決定場面にどんどん参画するような校務分掌のかたちを作らないと、学校は困ってしまうし、子どもは困ってしまうという、そんなことにやっと気づいたということです。ちょっと遅いのですけれども、そんなことが偏りという意味です。

（関貫市長）

　それは会社の役職でもよくある話ですよね。

（嶋教育長）

　会社も同じです。

（関貫市長）

　そうしたら、その上の「自分にはその力量がない」の後に続く文ですけれども、労働時間が増えると、自分の家庭の育児や介護との両立が難しいというのと、責任が重くなると、ということで、要するに難しいということが表現されていると思うのですけれども、例えばこの質問をした後に、「労働時間が増えない」「責任も重くならない」としたらどうだということは聞いたことがありますか。責任はしょうがない。労働時間の方かな。「今までと時間的な使い方は同じですよ、という条件の下であったら」という聞き方はしたことがない。

(こども教育課和田課長)

　それはないです。

（関貫市長）

　それはしたほうがいいんじゃない。今、これを聞いた時点では、自分の家庭の育児や介護等との両立が難しいと感じていらっしゃる方なのだから、「じゃあ家に帰って、夫とその部分を分かち合いなさいよ」ということが言えるのかと言ったらね、反対にこちらのサイドで。そんな個人のことまで言えないというふうに僕は思うのだけれども、そうしたら、その後、分かち合うということが常識的になってくるということを待っていたら、もっともっと長い時間、この問題は解決しないと思うのです。その前段で、労働時間のことだったら、制度的にバシバシとやればできるのではないかという部分があるから、そうなったらばということを聞いて見るべきかなと、ちょっと思いました。

ここも今言った内容に関わりますけれども、その他のところでも、自分の家庭の育児や介護というふうに、自分事が今やっていることで、どうしようもないという部分が、個別にはどうしてもあるので、そこを払拭しようといってもなかなかできないので、そこからのアプローチというのは、こういう問題は難しいかなと感じます。いつも。でも、夫が自分に代わって、育児も家庭もやってくれればすむことだと言えるけれども、そうしたら、男はこっちをして、女がこっちをすると、またそれもおかしいと。平等に分けてやるというのが最善であるという意識が働くから、こういう問題を解決しなければいけないってなる、と僕は思っている。それは家庭の中での話で平等にする話と、労働時間ということで、関与して、要するに社会の制度でしてあげるというのと、話が違うのでね、その辺の条件設定を細かくやった上で、個人の意見を聞いてほしいなというふうに思いました。

（正木教育次長）

　確かに、管理職の先生方は労働時間が多いというのは、現実問題でございますので、その辺は思っておられるのかなというふうに思います。仮にということで、それをまず是正することは大切だとは思いますけれども、そういった聞き方も１つ必要なのかなという意見です。副市長、何かございませんか。

（土生田副市長）

　２週にわたって、僕はジェンダーの研修会を。この間の土日は区長会で研修されて、そのいちばん最後のときに、僕のあいさつのときに、「できれば、次の日の日曜日にもういっぺん郷ひろみの、垣谷美雨さん原作の『定年オヤジ改造計画』がドラマでやりますから、まずはそれを見ていただいたら、いちばん分かりやすいと思いますよ」という説明をしました。そうすると、ある区長さんが「実は、私たちみたいな年代がいなくなれば、たぶんジェンダーギャップの問題は、ほぼ解消すると思います」と、そういう意見発表をされた方がいらっしゃいます。

ここのところの議論もずっとそうですし、うちの息子たちの夫婦だとか、娘たちの夫婦を見ると、本当に家事分担はできていて、自分たちで相談をして、お互いできるほうがするという、そこの暮らし向きもあるので。ただ、問題はなかなか世の中が変わらない、自分たちだけが変わっても、周りが認めない。それと、たぶん職場環境も一緒ですけれども、ジェンダーをもっと進めていこうとすると、たぶん女性も男性もお互いが思いやりを持って、優しく暮らせるため、そのためには働き方も抜本的に変えないと、高度経済成長時のイメージどおりでみんなが暮らして、仕事のやり方を考えている、滅私奉公みたいなあり方でも正しいという考え方も、まだおありの方がいらっしゃる。だけど、そうではなくて、お互いが適正な時間、仕事をして、適正な分配をされれば、たぶんここの最後のアンケートの部分で、家事と仕事のバランス、ワークライフバランスって、自分たちが考えなきゃいけない話でもあるし、それぞれの職場で直さないといけないという部分。

私の記憶の中では、私が財政課長の時に、財政課に女性が来るべきだということをずっと言い続けて、６年かかりました。女性が財政課に配置してもらえるようになるまで。だけども、その時もやはり、仕事のやり繰りが、時間を気にしない働き方をしてしまう職場を作ってしまうから、そうなってしまうので、そういうところも日々直さないといけない。たぶん教育現場でも同じようなことが、場合によってはあるのかもしれない。

だから、ジェンダーというのは、教育現場もでしょうし、すべての暮らしの中で、それぞれがお互いを思いやって、誰でも代替えがきくような仕組みになっていかないと難しいのだろうと思います。いろいろと研修を受ける機会がございまして、萩原先生の話も聞いていて、まだまだ歴史的には、ジェンダーの歴史なんかはそんなに、男女格差なんかはそんなに長い時代の話ではないのに、ずっと大昔から男女格差があるように思いがちですけれども、近い現代の話であるのに、今そこのところだけが刷り込みになっている問題が出すぎてしまうなと感じています。

（正木教育次長）

　委員の皆さんからもご意見をいただきたいと思います。

（成田委員）

　確かに副市長のお話の中でありましたように、私たちの世代がいなくなってしまえば、大変改善されるように私も少し思います。高度経済成長の話も出ましたが、その頃は私も学校に勤めていましたが、やたら遅くまで働いていたら、よく働いているような気分になりました。会社でもそうだと思います。それで日本の経済を支えてきたのかもしれませんけれども、今は全然そんな時代ではないですし、働き方改革と並行して、やっていかなければならないということはよく分かりました。

　ただ、そういう流れの中で、教育長がおっしゃったように、生徒指導はほとんど男性がしているということ、これは全然変わっていないということ、実際、私のイメージでは、女性のほうが生徒指導に向いていると、個人的には強く思っています。昔の中学校の生徒指導はいかつい感じで、違反するような生徒を威力や権力でどやしつけるというような、そんなことができないと生徒指導ができないというイメージがあって、そういうものがまだ残っているのかなという思いがあります。生徒指導の本質は絶対そんなことではありませんので、もっともっと仕事の中身も時間も時代に合わせて変えていって、生徒指導は女性のほうが向いているので、そういう風土ができていくといいと思っています。

　現実は女性の管理職が中学校で０、但馬でも女性の割合が低い、これはやはり豊岡としては、市の問題として大きく考えていかなければならないことだと思っています。

（向井委員）

　冒頭に教育長がおっしゃったように、部局と教育委員会が同じ方向を向いて、この問題を考えていくのはとてもいいことだと思いました。市としてもいろいろな施策をされていて、女性管理職が少ないという問題や、子どもたちはリーダー研修会でジェンダーギャップについて、学び始めていて、いい方向に向かっているのではないかと思います。

女性管理職になりたくない理由に関しては、「仕事と家庭・育児・介護の両立が難しい」というものがいちばん多いと思っていましたが、「力量がないから」というのは意外でした。その問題については、今後も上の方々の声かけや、様々なアプローチを続けていただいて、改善されていくことを期待しています。長時間労働の問題についても、今、講習会が企業や地区コミュニティなどで開かれているので、今後は少しずつ市民の意識も変わっていくのではないかと思います。

（佐伯委員）

　中学校の生徒会のリーダー研修会を見させていただきましたが、参加している生徒たちも、ジェンダーギャップについて、とても冷静に捉えていて、しっかりとした意見を交わしていましたので、未来のジェンダーギャップについては、少し安心しています。

　中学校の女性管理職の件については、少し残念に思いますが、家庭を持っている女性が管理職に就くのは、なかなか難しいことかもしれませんが、今後は周囲の声かけや、家族の協力を得ながら、ぜひとも頑張っていただきたいと思います。この問題は一気に改善するような問題ではないと思います。小学校の女性管理職が少しずつ増えている状況ですが、これは何年も前から声かけをしていただいた成果ではないでしょうか。今後も現場での声かけを続けていただいて、そういう意識を持った先生方が徐々に増えていくことを期待しています。

（飯田委員）

　学校におけるジェンダーギャップへの取り組みということで、女性管理職の割合などについて、説明をお聞きしましたが、このことが将来、子どもたちに与える影響は大きいのではないかと考えました。教育によって、子どもたちに平等ということを教えていくことで、社会がよくなっていくと思います。ただ、現在の状況を見てみると、社会全体の取り組みがもっと必要ではないかと思いました。

私事ですが、我が家庭では家内と24時間を共有しているのですが、僕は外に出ていて、家事は全くできない。できないのではなく、する時間がないのです。必然的にそれぞれの役割分担ができてしまっている。それが悪いかと言えば、悪いことはないのです。それぞれが家庭や職場で、個人、個人が平等ということを常に意識しながら、この問題にどう取り組んでいくか、どんな社会にしていくかを考えることが大事なのだと思います。

　先ほど、市長や副市長が言われたように、これは非常に時間がかかる問題だとは思いますが、しっかりとジェンダーギャップについて勉強し、子どもたちにも教えていく必要がある、それが教育だと思っています。恥ずかしいことではありますが、私は家事・炊事ができません。できることと言えば、食べたお茶碗を流しに持っていくことと、洗濯物をたたむことぐらいですが、それでもお互いを助けることにつながって、いいのではないかと思っています。

（正木教育次長）

　ありがとうございます。このジェンダーギャップについて、ご意見・ご発言等ございませんか。

次の議題に移りたいと思います。次は、WACCU TOYOOKAの状況について、こども育成課より説明をさせていただきます。

（こども育成課吉本課長）

　WACCU TOYOOKAの利用状況について、ご報告をさせていただきます。WACCU TOYOOKAにはいろいろな機能が集約していますが、主に子どもの遊び場の部分である「こども広場」を中心にご説明させていただきます。

まず、施設の概要ですが、今年の３月27日にオープンしました。場所はアイティの４階にありますが、管理運営の方法としては、指定管理という方法を使いまして、アイティ豊岡都市開発株式会社に管理運営をお願いしている施設です。

おさらいになりますが、利用者としては０歳から小学校６年生まで遊んでいただける施設になっています。火曜日が休館日です。利用時間は１日を４つのグループに分けまして、１クール90分ということで、ご利用いただけます。

利用料金は、個人で子どもが200円、大人が300円、団体はそれぞれ50円引きという設定になっています。１歳未満は無料です。

利用状況です。３月にオープンして、10月末までの実績で、トータル21,644名にご利用いただいております。10月９日に20,000人を突破したという状況です。利用の内訳を見てみますと、全体の７割が豊岡の方で、13％が但馬にお住まいの方、残り17％がその他の方の利用状況となっています。

開設後の効果の部分でいちばん大きかったものは、この但馬の天候、非常に悪天候の中でも左右されることなく、年間を通じて子どもたちが元気に遊べる場ができたということが、かなり大きな部分ではないかと考えています。

その中で、いろいろな取り組みをしてまいりました。まず、情報発信ということで、専用のホームページと、なるべくいろんなかたちで発信できるようにということで、インスタグラムもかなりの頻度で更新しております。また、様々なイベントも実施して、いちばん上のガラポン抽選会から、夏休み期間では、館内で生き物を探すというようなイベントや、10月１日には、ハロウィンなど、多くのイベントを実施しております。誘客の活動としましても、アイティの管理組合で、入場券を親子500組分購入いただいて、いろんな販促活動でも使っていただいています。

また、公立私立を問わず、保育所とか認定こども園等の団体利用もお願いしておりまして、多くの園児にご利用をいただいております。

実際の利用者の声です。こども広場の中に利用者の声を入れていただくボックスがありまして、実際に投函していただいたご意見です。「非常に道具やフロアがきれいだ。遊んでいて、気持ちがよかった」とか、「スタッフの対応もすごくよかった」「楽しく親子で遊びました」「道具がたくさんあって、子どもが非常に満足そうでした」「小学生にはもう少し難度が高めの遊具があれば」というご意見がありました。当日は雨が降っていたためにこちらのほうを選んでいただいて、「非常に楽しく遊びました」等々、いろんなご意見をいただいております。

　こども広場だけではなくて、いろんな施設が集約しておりますので、見ていただければと思っています。子育て総合センターもいろんな活動をしていまして、多くの方にご利用いただいている状況です。このようなかたちで、運動遊びの部分もご利用いただいています。

子育てなんでも相談室に確認をしました。９月末現在、延べ相談者数が361名となっています。相談の内容としては、子どもの保健相談が261件、妊産婦の相談と育児に関する相談が延べ475件受けたという報告を受けています。やはりアイティの４階ということで、「気軽に相談ができる」「行きやすい」という声を直接いただいているとお聞きしています。

　ファミリーサポートセンターもいろんな活動をしておりまして、研修会をしたりとか、子どもと一緒に交流会をしたりしています。事業としては、このような場所の使い方をしながら、会員の交流を図っているところです。

会員数ですけれども、３月末が299名で、10月末では326名ということで、27名増えています。こちらも「いろんな相談がしやすい」という声を直接、現場のほうにいただいています。

みらい応援Roomもいろんな活動をしておりまして、ハローワークが子育てママのためのハローワーク出張相談や女性のためのチャレンジ相談というものをされています。いろんなかたちの事業を展開していただいています。

　11月１日にこども支援センターがアイティ７階に移転をしました。オープンしてまだ10日ほどですが、いろんなかたちのご利用をいただいているという状況です。また機会があれば、どうぞ見に行っていただければと思います。

　課題感です。課題感としては、年間の目標値につきまして、やはり利用実績が低迷しているという課題があると認識しております。こちらのほう、年間の目標値を85,000人ということで、目標設定をしておりますが、先ほど言いましたように、21,000人の利用実績で、約25％となっております。この主な理由は何なのかということを分析しています。

１つが、2019年の10月から、幼児教育・保育の無償化が始まりました。それによって、在宅児が減少しているという要因です。これによって、平日の利用が減って低迷しているということが大きな要因であると分析しています。

それと、２つ目に、コロナの感染の状況で、特に夏休み期間、非常に感染者が多かったことで、外出機会が減少したものと分析をしています。それと、まだまだ認知度が低いということで、まだ利用されていない方が多く存在するのではないかという分析をしています。

それぞれ見てみますと、先ほどの無償化の影響の部分です。今、０歳から５歳児で、何らかの園に入っている方がトータルで、75.3%おられます。３歳から５歳児の入園児を見てみますと、96.5%が何らかの園に入っているという状況になります。このことから、平日に宅児が少ないという状況が見てとれます。

コロナの関係では、第７波は７月・８月が特にピークで、８月の未就学児・小学生の感染者合計が848名でした。７月・８月合わせて1,221名の感染者があったという状況です。今、豊岡市の小学生と未就学児を合わせると、約7,000名になりますので、17.5%が感染していたという状況があります。また、この7月・８月をメインのターゲットシーズンと思っていたところですが、感染者が多くて、利用控えということがあったのではないかと分析しております。

これを受けて、今後の取り組みとしては、もう１つのターゲットシーズンとして、冬期間を設定しています。この屋内型の遊び場というのは、夏場の暑い時期と、冬場の特にこのあたり雪が降って天候の悪い時がターゲットシーズンと考えていますので、冬場に向けての利用促進を図ってまいりたいと考えております。

主な取り組みとして、先ほどありましたように、親子の招待券を未就学施設にお配りをしたいということで、アイティと調整をしている状況です。あと、園関係のほうにも団体利用ということで、お願いを継続的にするということ、誘客イベントを実施したりして、継続的な情報発信をしながら、誘客につなげていければと思っています。

情報発信等を誘客につなげればというような１つの案ということで、今度11月26日に「わくわくまつり」を４階・７階で、周知も兼ねて、簡単なイベントをしたいということで、今企画をしております。皆さんにはボランティアで、いろんなかたちの日頃の成果や、やっている活動を見ていただく、そのようなまつりにしたいと、今準備を進めております。専門職大学の学生さんや、豊岡短大の学生さんにもお力添えをいただいて、いろんなイベントができればということで、今、調整をしています。ぜひ、11月26日（土）アイティのほうにお越しいただければと思っておりますので、よろしくお願いします。

**[日程４　閉会]**

（正木教育次長）

　ご意見がございましたら、よろしくお願いします。

それでは、以上をもちまして、2022年度第２回の豊岡市総合教育会議を閉会させていただきます。ありがとうございました。

―――――――――――――――　閉会　午後４時５分　―――――――――――――――